

くらよし

August

2007 8・15

平成19年8月15日号

No.1346

まちづくりキャッチフレーズ 人と自然と文化がつくる「キラリと光る新中核都市」



第31回 倉吉打吹まつり

CONTENTS

- 第31回倉吉打吹まつり……………2～3
- 戦争体験手記……………4～5
- メール配信サービス／倉吉天女音楽祭……6
- 保存樹⑤／淀屋里見④／KAMI あかり ……7
- ソナ チャン・イヤギ／岩合光昭写真展／動物愛護フェスタ写真募集……………8
- 指定管理施設／韓国映画上映会……………9
- インフォメーション……………10～13
- あんしんファイル……………14～15
- 若者の定住化に向けて／人口……………16

8月5日(日)



倉吉スタイル~



8月4日(土)

第31回

倉言 打吹

～前進!



悪かった食料事情

築山 文四郎

戦争体験者の多くは高齢となられ、体験は時代とともに埋もれていこうとしています。

倉吉市では、後世に語り継ぐものとして戦争体験者の皆さまの体験手記を募集しました。投稿いただいた4人の手記を紹介します。

終戦後62年が経過しました。今日の平和と繁栄は、戦中・戦後の混乱と復興の時代を国民全体が支えてきたことによるものです。

さらなる市民生活の安心・安全と世界平和を望む観点から、先の戦争体験を次世代に語り継ぐことが必要です。

戦時中、国民を悩ませたのは食料不足だった。米穀配給統制応急処置令が昭和14年に施行され、米は配給通帳がなければ手に入らなくなった。大東亜戦争が始まり18年には、学徒戦時動員令が公布され理工科系の学徒は工場で働く事になった。食事は外食券と言う電車の回数券みたいな食券が毎月渡され、食事はこれを持って外食券食堂で食べる。この食券は労働条件により白、青、赤の三種類に分かれ支給された。米飯量は白が少なく赤が多い。私の券は白で飯の盛りが多い赤を羨ましく思った。休日は月に二度あったが、その日は雑炊食堂の列に並んだ。配給以外に食べ物を口にする数少ないチャンスであった。

雑炊は米よりも芋のつる、大根、豆などが多く、割り箸を真ん中に立てて倒れぬ程の濃度が必要とされていた。子どもの手を引き鍋を片手に並んでいる主婦の姿も多かった。この話をケアハウスの仲間にしてみた。田舎では地域により食料事情が良く、この様

なひもじさは経験しなかったらしい。内地では都会より食料事情が異なっていた様だ。戦争末期には日本中が爆撃され、破壊された軍の倉庫で多量の蜜柑の缶詰が焼け、それを近所の住民が持ち出した。甘い物など手に入らぬ時期、違法と知つての行為であった。食料が配給されたのもこの頃だ。コーンビーフの缶詰やスープ用のグリーンピースの粉など米の代わりに配給されても食べ方がわからぬ人も居た。キューバ糖が配給されたのもこの頃だ。キューバ糖でどうやって腹のたしにするのか。考え出したのがカルメ焼きだった。

当時「真相はこうだ」と言う番組では「貴方は今何をしていいますか」の台詞で番組を終わっていた。三木トリローの「冗談音楽」がこれを取り、「貴方は今何をしていますか」と問いかけ「カルメ焼きを焼いています」で締めくくり、聞いた者は溜飲をさげていた。

第1選抜として、昭和19年9月1日、鳥取中部47部隊の或る小隊に入隊しました。初年兵教育の期間が過ぎると、中等学校以上の学歴者に、幹部候補生の募集(実際は強制)が知らされました。私は応募しなかったが、連隊本部からの伝達として、小隊の古参上等兵殿から呼び出しを受けました。何事?と思いつら出向くと、連隊事務室の准尉殿から「何で幹候に応募しないか」と質されて、(母・姉・中学生の弟が)過重な米麦の供出の責を担っている家庭の事情を説明し、出来れば1年でも早く除隊して、食糧増産にはげまなければならぬと考えていると述べると「そうか」と頷いて「幹候を終えて任官すれば、直ちに予備役編入だ」「はっ、解かりました」という具合で応募することになりました。彼の上等兵殿に報告するとたんに大喝「ダラズダーワリヤー、予備役編入即日召集ダゾー、コノアホンダラー」それで、ハツと吾に返った初年兵でした。

准尉殿にはうまく嵌められたこと、今は戦争中なんだということ—
そういうことがあって、兎も角、幹候の集合教育が始まりました。その結果「フロントウドリヨクノカイモナク」まことに残念乍ら、オチ幹(乙幹)下士官 甲幹(将校)になりました。

私の戦争体験手記

増田 高德

徴兵年齢19歳に引き下げの

乙幹教育中のあるとき、予備役40歳代の少尉中尉さん達が教育招集とかで召集されて来て、その演習の兵隊役に参加させられたことがあります。今の鳥取空港辺りの畠から、松林を抜けて海岸に向け、銃を両手で捧げ持ち、両肘をついてトカゲが走るように匍匐前進しなければならぬ状況設定の中で、オッサン中尉殿は「ソナンセンセエデモエー」と仰るので、中腰でゴソゴソ歩き、止まってはシャガンでいました。

そんな演習を何日かやったことがありました。後で分かっていたことでしたが、その頃、原隊で射撃が確実で狙撃兵に選任されていた戦友たちが、沖繩戦場に派遣されて征ったということでした。

倉中2年先輩の方も見かけました。出迎えた時は、皆元氣そうで笑顔だったのですが、一夜あけてトイレに行く何人かの人と会った時には、ほんとうにびつくりしてしまいました。手を前に出して、壁を伝って、まるで生気もなくそろそろと歩く姿は幽霊そのものでした。

二度とこの様な戦争をしてはならぬ

衣笠 末春

昭和12年7月7日の夜、北平(現北京)永定河畔の盧溝橋に於いて日中両軍の間